校長室だより～燦燦～ №６１３

ローマ人の物語

2022.8.29

『ローマ人の物語』という歴史小説がある。著者は塩野七生さんである。１９９２年に第１巻が刊行された。１９９９年４月から２００２年３月までイタリアのローマに住んでいたことがある。この３年間は日本の書籍など読まなくてもいいだろうなどと考えていたが、甘かった。高い授業レベルを維持するにはインプットが必要である。多くの教育書を日本に置いてきたことを後悔した。結局、日本の書籍をネットで購入することとなった。

その中に教育書ではないが、『ローマ人の物語』があった。同僚からその存在を教えてもらった。著者はローマ在住だという。試しに第１巻を取り寄せてみた。読んでみた。吸い込まれた。一気に読んだ。すぐに第２巻を注文した。こんな調子で第８巻まで読んだ。いつの間にか、寝る前の読書が習慣となった。

この本は、年に１冊執筆されていた。１９９９年が第８巻の年だった。ここからは、ローマにいながら第９巻、第１０巻の刊行を待たなければならなかった。その間、『塩野七生「ローマ人の物語」の旅 コンプリート・ガイドブック』なる魅力的なタイトルの本が世に出た。もちろん、すぐに購入した。

第１１巻からは日本で福島で読むこととなった。購入金額は、それまでの半額で済むようになった。この本は、２００６年の第１５巻をもって完結した。読み終えたときの、あの何とも言えない充実感、満足感、名残惜しさは、今でも覚えている。そもそも分厚い単行本を１５冊も読んだことなどなかった。このときは、単行本はいずれ文庫本になることなど考えてはいなかった。２００２年、私が日本に戻ったタイミングで文庫化された。全４３冊である。

この本は、なぜローマは普遍帝国を実現できたのかという視点のもと、ローマ建国から西ローマ帝国の滅亡までを描いている。ローマの歴史ではあるが、ローマ人とあるように人物の歴史である。次から次へと魅力的な人物が登場する。世に広く知られているところでは、ハンニバル、ポンペイウス、そして何といってもユリウス・カエサルにアウグストゥスである。ネロもいる。

塩野七生さんの手にかかると、それぞれの人物の魅力度が増していく。この本を読むまでは名前ぐらいしかわからなかった人物のことを詳しく知ることができた。歴史は人がつくっている。ローマの歴史から学ぶことがたくさんある。それは現代にでも通ずることが多い。

「ローマは一日にして成らず」これは、第１巻のタイトルである。「すべての道はローマに通ず」は第１０巻のタイトルである。この２つの諺からもローマの存在というものが浮かび上がってくる。

イタリアそれもローマにいたからこそ単行本で読んだが、日本にいたら４３冊の文庫本を読むとは思えない。そう考えると偶然のように思えるが、『ローマ人の物語』との出合いは、もしかしたら必然だったのかもしれない。

日本に戻ってからは、著者の塩野七生さんのエッセーも読んでいる。洞察眼が鋭い。イタリア在住だからこそ、かえって日本のことが見えている。客観的に日本のことを論じている。参考になることが多い。

もう少ししたら、もう一度、『ローマ人の物語』全１５巻を読んでみようと思う。以前読んだときの、あのワクワク感とはまた違った何かを感じるはずである。楽しみである。